

存在論的差異をめぐる 「必然的な迷いの道」の一解釈

渡辺 和典

[キーワード：①存在論的差異 ②Als 構造 ③超越論的思考様式]

略記法

- ・ Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 17 Aufl., Max Niemeyer, 1993 (『存在と時間』) の引用は、SuZ の記号の後に頁数を記した。
- ・ Ga は、Martin Heidegger Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann の略とし、巻数、頁数の順で記した (例えば、Ga 26, 100 であれば、全集26巻、100頁)。
- ・ 原文における強調は付点をもって表し、筆者による強調は下線をもって表した。
- ・ 引用訳文中における [] は、筆者による補足とする。

はじめに

われわれは A という事柄を思惟するとき、それを B や C という事柄ではなく、まさにそれらとは異なる或るものとして A を思惟している。つまり、なんであれその事柄自体は、その他の事柄からは区別され、差異化されてこそ主題とされる。このように解するならば、「差異」という事象はわれわれの思惟の働きにつねに付随し、またその根底に存する事態であると言うのでなければならない。ただし、ここで挙げた例は存在者間での事例にすぎない。しかし、このような存在者間の差異が可能

である以上、その可能性の根拠があると言わねばならない。適宜変更を加え慎重になる必要はあるが、或る意味でこのような可能性の根拠が「存在」と呼ばれるものであり、そして、存在者とは異なる或るものとして存在が考えられていること、この事態をハイデッガーの述べる「存在論的差異」(ontologische Differenz)は指し示している。ここで可能性の根拠(制約)という表現を用いたのは、超越論的思考様式を取って想起させるためである。事実、「基礎的存在論」(Fundamentalontologie)を構想していた時期のハイデッガーは、存在者と存在を区別することを「クリネイン」、「批判すること」と述べ、さらに「批判的な学としての存在の学」を「超越論的な学と名づけることもできる」(Ga 24, 23)と述べている。もちろん、ここでの「超越論的な学」は、カントの超越論哲学における「超越論的」と意味内実異なるが、『存在と時間』期におけるハイデッガーの思惟が、カントから多大な影響を受けていることを鑑みれば、この時期の存在論的差異の問題は、超越論的思考様式に引きつけて考えることができるだろう¹⁾。

存在者同士の差異ではなく、問題は存在者と存在との差異である。ところで、基礎的存在論は「存在理解」(Seinsverständnis)を手引きとし、「存在の問い」(Seinsfrage)を仕上げることを通じて、存在の概念把握を目指す。存在理解は、存在者とは異なる存在の理解なのだから、その前提に存在論的差異が存するのであって、したがって、存在の問いは存在論的差異という洞察に基づいてこそ可能であると言える。『存在と時間』において、存在は「存在者を存在者として規定している」(SuZ, 6)という仕方で語られている。とすれば、超越論的思考様式によって支持された『存在と時間』期のハイデッガーの思惟の核心は、存在論的差異の内実にこそあると言うべきである。

ただし注意すべきは、ハイデッガーにとって存在論的差異は決して一義的に考えられていたのではなく、思索のあり方に伴ってその内実は変容している、ということである。ハイデッガーが回顧して述べているよ

うに、「…ひとは、1927年から1936年までの存在論的差異への絶え間ない関わりを、必然的な迷いの道〔Holzweg〕として見なければならぬだろう」（Ga 15, 366）。この述懐を受けて、本稿は、なぜ存在論的差異の問題が「必然的な迷いの道」を歩まねばらなかったのかを詳らかにすることを試みる。この問題を明らかにするにあたって注目すべきはその時期である。1927年から1936年という時期が指し示しているのは、『存在と時間』の刊行から、『哲学への寄与』が起草される年までである。つまり、基礎的存在論構想から、その徹底化、放棄、そして形而上学的思惟とは別の思索の準備（すなわち「存在の歴史的思索」と特徴付けることのできる時期である。本稿は、この「迷いの道」の全行程を踏破、検討するのではなく、その時期を1927年から1930年までに限定して、超越論的思考様式と存在論的差異の関わりを浮き彫りにする。これをもって、超越論的思考様式が存在論的差異の問題を担いきれなくなるその様子を描出することを試みる。そしてこの事態が、ハイデッガーの存在論的差異への関わり方をめぐる「必然的な迷いの道」のひとつであることが明らかになるであろう。

I Als 構造と存在論的差異

われわれはまず Als 構造を取り上げることで、超越論的思考様式と存在論的差異との関わりを解明するための糸口にし、さらに、節を追ってこの構造の射程と事象的可能性をも論じることにしてしよう。

Als 構造が、ハイデッガーが『存在と時間』で扱った主題のなかでも非常に重要なモチーフのひとつであることを、ここで強調しておいてもよいだろう。それは、単に『存在と時間』という根本書においてのみならず、彼の後期の思索にまで影響しているという意味で注目に値する²⁾。Als 構造は、存在の問いを問うことを遂行する以上、即ち、存在者とは異なる或るものを存在として問い続ける以上、ハイデッガーの思

索から切り離せない事柄である。というのも、われわれが言語を用いて事象への接近を試み、当該事象を掴み取るために行う概念化という作業は、「或るものを或るものとして」という構造を取らざるを得ないからである。それだけではない。この構造はなにか論理的機能を意味しているのではなく、われわれが存在者と関わるあらゆる振舞いにおいても、先述定的に機能してしまっているのである³⁾。『存在と時間』の表現で言うならば、われわれのあらゆる振舞いは「理解的-解釈的〔*verstehend-auslegend*〕」(SuZ, 149)に行われるのであり、つまり、「解釈学的 Als」によって構造化されている。そして、このように Als 構造をもつ存在者だけが、種々様々な存在者を、例えば、「椅子」や「コップ」〈として〉有らしめる (*sein-zu-lassen*) ことができるのである⁴⁾。

では、この Als 構造はいかなる意味で存在論的差異と関係しているのだろうか。最初に確認しておかねばならないが、存在は存在者ではないし、また、存在それ自身は端的にそれだけで享受されるような或るものではない。存在は、存在者の存在であるからだ。この事態から帰結することは、存在は存在者の存在「として」学的に解釈 (*Interpretation*) されるということである。

さて、自己の存在にたいして理解的關係性を可能的に有する存在者、すなわち現存在のみが存在論を遂行しうる。基礎的存在論が手引きとするのは存在理解であるが、この理解が、存在理解であることに注意が必要である。存在者理解ではないのである。そもそも、たとえ非表明的、先理論的、あるいは先存在論的にせよ、存在が理解されていればこそ、存在者は現存在にたいして或るものとして有ることができる。すなわち、基礎的存在論構想においては、存在理解は存在論的差異が与えられてはじめて可能になるのであるし、さらには存在論が可能になると言えるのである。1928年夏学期講義ではまさに次のように語られている。「存在の理解のうちには、存在と存在者のこの区別の遂行が存している。この区別は、まずもって存在論というようなものを可能にする。したが

ってわれわれは存在理解というものはじめて可能にするこの区別を、存在論的差異と名づける」(Ga 26, 193)。

ここで整理してみよう。極めて図式的に根拠付けの連関を示すならば、存在論的差異から存在理解、そしてこの理解を仕上げることとしての存在論ということになる。存在論的差異がもつとも根源的であることがわかる。しかるに、上で確認したように、Als 構造もまた、われわれの態度一般（それが実践的、理論的いずれに形容されようとも）を可能にしていると言うことができる。それならばいずれの事象がより根源的であるのかという問いが立てられるが、これは擬似問題であろうか。先に述べたように、基礎的存在論構想を持っていた時期のハイデッガーが、超越論的思考様式を採っていたことは事実である。とすれば、存在論的差異と Als 構造のいずれが可能性の制約かを問うこと、そしてこの問いがいわば破綻してしまう様を描き出すことは、同時にハイデッガーの当時の思惟のあり方を明確にすることになるだろう。

II 存在論的差異に対する Als 構造の優位

存在論は存在論的差異が根拠となることで可能になる。存在論は、存在の問いを学的に仕上げることである。学的に仕上げるとは、所与として与えられた或るもの（存在論であれば存在）を、これこれの或るもの「として」表明的に取り出すことである。基礎的存在論は、現存在を範例的存在者に置き、ここから、存在を存在者の存在として——*Sein als Sein des Seiendes*——解釈する。ここに明確に示されているように、存在を論ずるに際しては「存在者の」という限定が付かざるを得ない。この限定によって、『存在と時間』における現存在分析を例にとるなら、存在は現存在という存在者の存在として学的に解釈されるのである。さらにはこれを基礎として、存在はさらに様々な非現存在的存在者（例えば、自然、生物、芸術作品など）の存在として解釈されうる⁵⁾。

ここで再び存在論的差異の内容を確認するなら、それは存在者と存在との差異を意味していた。ところで、存在者は、有ると言えるところのものすべてであり、種々様々な仕方の有り方をする或るものである。他方、存在はこれら存在者とは区別される或るものであり、それ自身存在者ではない。存在者は存在する、有ると言明することはできるが、存在は存在する、有ると言明することはできないのである。そうでありながら、存在がそれとして語られうるためには、存在者を必要とせざるをえない。なぜならば、「存在とはそのつど存在者の存在である」(SuZ, 9. 強調引用者)からだ。存在はいわば「経験」されているが、それとして語り出されるために存在者を必要とするのである。

存在は、存在論において語り出されねばならない。『存在と時間』において、存在論的差異の問題系につながる術語として機能している「存在論的」(ontologisch)、「存在者的」(ontisch)という表現は、1928年夏学期講義では「言表」(Aussage)に関しても形容される⁶⁾。つまり、存在を問いつつその本質を顕わにする思索の表現が「存在論的言表」なのであり、換言すれば、存在を語るロゴスこそが〈存在—論〉なのである。もし、存在論的差異が超越論的思考様式にそって考えられていたとするならば、語りの可能性の制約は同時に、語りの対象——ここでは存在——の可能性の制約であると、カントに即して表現することができる⁷⁾。ここで制約として機能しているものが存在理解である。そして、すでに見たように、この存在理解は、存在論的差異によって支持されてはじめて与えられる。とすれば、ここに超越論的思考様式にみられる構造が浮き彫りにされていると言えよう。すなわち、「経験的」/「超越論的」、さらに別の表現をするのであれば、制約される/制約する、構成される/構成するという構造である。

そして、上述の構造がまさに存在論的差異に見出せるのである。ハイデggerは、自らに固有の文脈で、存在が存在者を「可能にする」、「構成する」という言い方はしないであろうが、存在と存在者というこの二

者の関係性は、一方が他方に対して効果・作用を及ぼすという仕方でも、あたかも二つの事象領域があるかのごとくに表象されてしまうことをもって特徴付けられる。存在は存在者からは差異化されているし、その逆も真である。つまり、超越論的思考様式における経験的/超越論的、構成される/構成されるという二分法は、基礎的存在論においては存在と存在者との関係性に反映されている（術語で言えば、「存在論的」「存在者的」、「実存論的」「実存的」もそうである）。畢竟、二つの異なる事象領域がまずもって与えられており、これらの関係性が問題となるということである。ここから、存在論的差異という表現における「差異」とは、（存在者から）差異化された（または存在者を自らと差異化する）或るものとしての存在が、（存在から）差異化された存在者とは違うという意味で捉えられる。ここで「差異」の事象性格は、これら差異化された或るもの同士の関係性からしか接近されてはいないのである。この「差異」は、静的に横たわるものとしていわば「実体化」されているとも言えよう⁸⁾。そうであればこそ、例えば、1927年夏学期講義では「存在としての存在の対象化 [Vergegständlichung des Sein als solchen]」（Ga 24, 398f.）という表現が用いられもするのである。

以上述べたことから、超越論的思考様式を暗に継承してしまっている基礎的存在論において、「存在」でさえも「対象化」されると表現されてしまうのは、それが存在者から差異化された或るもの〈として〉定立されてしまうからだ、とすることができる。さらには、存在論的差異における差異は、存在と存在者との差異〈として〉定立されてしまうだろう。というのも、存在論的差異もそれ自体として接近可能なものではなく、存在者を必要とするからである。したがって、Iにおいて提出された問い、存在論的差異と Als 構造のいずれが可能性の制約であるのかという問いは、次のような回答を得ることになる。基礎的存在論構想の時期において語られる存在論的差異は、いかにそれが存在理解を与える根源として思惟されていようと、その差異が差異化された或るもの同士

の関係性くとして〉捉えられている限り、そしてまさにここにくとして〉が見出されているように、Als 構造のほうがより先であると言えるのである。

Ⅲ Als 構造の射程

Ⅱの最後で、われわれは「Als構造のほうが存在論的差異よりも先である」ということを述べた。しかし、このように言うだけでは不十分である。「より先である」ことの内実が明確に取り出されねばならないからだ。以下に、Als 構造が「より先である」ことの意味を「言葉」の問題と連関させて論じることしよう。なぜなら、そもそも『存在と時間』において Als 構造は、「解釈」(Auslegung)・「言表」(Aussage)の本質構造として論じられるのであり、これはそもそも言葉の問題とは切り離せないからである。

『存在と時間』において論じられる Als 構造は、言表の次元を特徴付ける「アポファンティッシュな Als」(apophantisches Als)と、「見廻しの対处的な」(umsichtige, besorgende)次元を特徴付ける「解釈学的 Als」(hermeneutisches Als)とに分けられる。前者は後者が「水平化」されたものであり、また、「世界性を構成している有意義性の指示連関から切り離され」、いわば主題化されてしまっている (SuZ, 158)。他方、解釈学的 Als は、世界における様々な存在者との関わりにおいて、現存在のあらゆる振舞い一般を規定している。世界が、多様に、しかもそのつど現存在にとって分節され、その「分節の諸可能性」(ibid.)を有するのは、そこに解釈学的 Als が機能しているからである。アポファンティッシュな Als は解釈学的 Als の派生態と言うこともできるし、或いは、解釈学的 Als がアポファンテッシュな Als を可能にしているとも言えるだろう。ここにもまた、超越論的思考様式が潜んでいることは容易に想像がつくであろう。ゲートマンは解釈学的 Als 構造に関して次のように述

べている。「解釈学的な或るものを或るものとしてにおいて〔Im hermeneutischen Etwas-als-Etwas〕、超越論的存在論的な総合はアプリアリに表現にもたらされる。どんな或るものも、アプリアリに、すでに「成し遂げられた」対象性の或る普遍的地平において遂行されるのである。Als-構造という考えは、古典的超越論哲学において反省がもっていた機能を引き受けているのである。つまり、すでに、超越論的に構成されたものとして遂行されていない或るものは存在しないということである⁹⁾。つまり、どんな存在者であれ、それが有ると言えるのであれば、それはつねにすでに Als 構造によって分節されてしまっているということである。

ふたつの Als 構造を、世界という現象に鑑みて言うと、解釈学的 Als はアポファンティッシュな Als へと「脱世界化」(Entweltlichung) されることが分かる¹⁰⁾。いわば「意識せずに」日常的な振舞いがそれとして可能なのは、そこに、世界性を特徴付けている指示連関が滞りなく機能しているからである。アポファンティッシュな Als は、直前的存在者に関する言表において働くのであるから (SuZ, 158)、この指示連関から「切り離され」る。その意味で「脱世界化」と言えるだろう。ここに、言葉の問題を Als 構造へと繋げる点が見出される。言表において働く Als は、事実上、言語化されているのでなければならない。このコップは、「何として [als Was]」、例えば、「ガラス製である」、「耐熱性である」、「緑色をしている」等、その様々な諸性質に関して言明されうる。では、解釈学的 Als においてはどうか。果たして、日常的な態度・振舞いにおいて働いている Als は、それ自身、言語化されていると言えるのであろうか。この問いに答えることが、Als 構造のほうが存在論的差異「よりも先である」の内実を明らかにする役割を担っている。

上述の問いに答えるために、ゲートマンの問題提起を受けるかたちで、われわれにとっての解を提示したい。まずは、ゲートマンの論述を確認しておこう。

言語への転回の問題を顧慮することで問われるべきは、解釈学的 Als の領域はハイデッガーにとって言語的に、あるいは先言語的に構造化されているのかどうかである。言語ということで、たとえば明確な命題という局面が理解されるのならば、解釈学的 Als の領域はまさに先言語的である。しかし、言語ということで述定的に [prädikativ] 構造化されたものの全領域が理解されるなら、解釈学的 Als の領域は言語的である。この区別をはっきりさせる術語的可能性のひとつは、解釈学的 Als の領域を、先-命題的ではあるが述定的 [vor-propositional aber prädikativ] なものとして特徴付けることであろう。明確に認知する行動に先立つ全経験領野は、ハイデッガーによればすでに述定的に構造化されているのである。それは述定的規則の体系であり、この体系は経験領野を形作っており、そして、明確な認知的行動へと入り込む諸質料を意のままにしているのである。この経験という領野が言語的に、あるいは先言語的に特徴付けられるかどうかは、したがって言語概念に依存している。¹¹⁾

ゲートマンによれば、言語がいかに理解されるかによって、解釈学的、或いはアポファンティッシュな Als を特徴付ける仕方が変わるといふものである。ここで重要なのは、「述定的」と「命題的」という語の意味であろう。命題的ということでは、実際に発話されたり、書かれたりなどした言語現象、さらには、判断というかたちをとった言語現象が念頭にあるだろう。他方、述定的ということでは、それとして明言されたりしなくとも、われわれの振舞い・態度一般が滞りなく機能していることを意味するものである。解釈学的 Als によって「全経験領野が述定的に構造化されている」ことであるとしたのは十分に理解できる。さて、述定的、命題的のうちいずれの場合においても言語現象がそこに見出せるのかどうかの問題である。そこで、さらにゲートマンの問いを引き受ければ、「言語「というもの」がなん「であるか」という問いが問

題なのではなく、われわれはいかにして言語を理解せねばならないのかが問題なのである」¹²⁾。このような問いから、ハイデッガーにとって「言語」はいかなるものとして理解されていたのかと、さらに限定的なかたちで話を進めよう。

存在論的差異は、差異化された或るものを基にして考えられている。すなわち、存在と存在者は差異化された或るものとして考えられていると、われわれは述べた。つまり、存在論的差異は、Als 構造による分節をすでに受けてしまっているがゆえに、存在論的差異として接近可能である。もちろん、存在論的差異が、言語現象という現場において語り出されているから、換言すれば、アポファンテッシュな（命題的）Als による分節化をまずもって経ているから、Als 構造のほうが先であるというのではない。もしそうであるなら、日常的な場面においてわれわれがなんらかの振舞い・態度をとる場合においても、存在論的差異は潜在的であるにせよ、つねに与えられていなければならないと、ハイデッガーは言うだろう。だがこの場合でさえも、われわれは、何らかの仕方でも Als 構造による分節化を、この存在論的差異は享受してなければならないと言いたいのである。このことを、次に述べる事態を考察することで明らかにしたい。つまり、基礎的存在論構想の時期において、Als 構造が存在論的差異を可能にしている制約である、ということが言える最大の根拠は、Als 構造と「言葉」が暗黙の裡に関係を結んでいたからである、と。それは分節(化)ということに懸かっている。どういうことか。

存在論的差異という事象がそれ自身を示しており、これを学的に「見えるようにする」(sehen lassen) ことは、必然的に、自らを語り出す (sich aussprechen) という仕方でも「世界的な」有り方を引き受けなければならない。『存在と時間』は、「言葉」(Sprache) を「語り [Rede] が語り出されたもの」と規定し、「或る固有な「世界的」存在」を有すると述べる (SuZ, 161)¹³⁾。更に続けて、言葉は手許的存在者のような内世界

的存在者としても見出されるし、そして、「直前的な諸々の単語という物」へといたる可能性をもつ (ebd.)。ここに見出されるのは、手許的存在者から直前的存在者への様態変容であり、ふたつの Als 構造においても指摘しておいた「脱世界化」である。本来であれば、『存在と時間』において言葉の「世界的」存在が、さらに突き詰めて論じられるべきであったのだ。というのは、『存在と時間』で論じられる言葉は、手許的存在者か、或いは直前的存在者かのいずれかの有り方においてしか概念規定されてはいないからである。

このような様態変容から明らかなのは、顕在的・潜在的という構図である。『存在と時間』の方法を扱った7節が述べているように、「現象学は…自らを示すものを、それが自らをそれ自身から示しているまにそのように、それ自身のほうから見えるようにさせること」(SuZ, 34)である。そうであれば、基礎的存在論における現存在の分析論は、様々な実存カテゴリーを「見えるようにする」仕方を取り出す作業であると言えるのであって、逆に言えば、自己を示してはいるが見えてはいなかった事象を見えるように語り出すことである。とすれば、ここで指摘せねばならないのは、解釈学的 Als が潜在的なものであるにしても——或いは潜在的と言える事象ならば存在論的差異でもその他のことでもかまわないが——、それが基礎的存在論における分析論で語り出されてしまうのであれば、それを理解する存在者にとっては、逆説的にも、顕在的な有り方をせねばならないということである。もちろん、ここで言いたいのは、語られたものしか現象として認めないであるとか、意識哲学と言語哲学との対立を指摘したいのではない¹⁴⁾。あくまでも学としての現象学的存在論を遂行するに際して、潜在的な或るものは、それが語り出されるという仕方でのみ接近可能にならざるを得ないということが言いたいのである。そして、潜在的なものが語り出されて、それ<として>接近可能になるというこの地点においてこそ、言葉の有り方が真摯に問われねばならないはずなのである。

ところで、『存在と時間』における「言葉」の分析は、完備されたものではないし、あくまでも現存在の存在体制のどこに、「言葉」の「存在論的「所在」」があるのかを示しているだけだ、とされるのみである（SuZ, 166）。さらに、言葉という現象は実存論的には「語り」によって支持される。この「語り」は、「語りとは理解可能性の分節である」（SuZ, 161）と規定されているように、その根本性格を「分節」のうちにもつ¹⁵⁾。Als 構造も、言葉も、そして語りも、この「分節化」（Artikulation, 或いは Gliederung）を特徴とするとよい。Als 構造は、或るものを或るものとして、という仕方で二つの或るものを要請する構造をとり、それが如何にこれこれくとしてあるかが問題となるがゆえに、そして、言葉も或る事態を表現する際に、たとえ主語が語り出されなくても、本来的には語り手と語られる事態との関係性が問題となるがゆえに、総じて、「分節化」とは、或るものと或るものが関連し、かつそこになんらかの構造が成立していることであると理解できる¹⁶⁾。つまり、Als 構造と言葉はこの「分節化」という点で結ばれているのである。

存在論的差異は、それくとしてわれわれに対して自己を示してくる。しかしより詳しく検討するならば、すでに見てきたように、その差異は、存在が存在者とは異なる或るものとして、かつ同時に、存在者が存在とは異なる或るものとして定立される、そのような差異である。しかも、こうした表現に端的に見出されるように、存在論的差異は、Als 構造を介してのみ接近可能になるとさえ言える。なぜならば、潜在的にせよ顕在的にせよ、いずれの場合においても当該の事象が分節化されてしまっている（分節化され得るのではなく）のでなければ、この事象そのものが語りえないものになってしまうからである。事象が分節化されているのでなければ接近可能とはならないということは、『存在と時間』の方法論を示す「現象学」の定義からも言えるのでなければならぬだろう。『存在と時間』では、「現象学」の定義が、「自らを示すものが、それ自身のほうから自らを示すように、それ自身のほうから見えるよう

にせしめること」(SuZ, 34)とされ、「現象学的な現象概念」で意味されているものは「存在」である。したがって、「存在」はそれ自身のほうから、「自らを示してくる」のであり、さらに言えば、「存在」は存在者とは異なる或るもの(として)自らを示すのでなければならない。つまり、「自らを示す」現象はすでに、つねにすでに分節化された仕方(で)「自らを示す」のでなければならないのだ。

さらに、『存在と時間』の第7節で語られる「ロゴスの概念」からも Als 構造を照射することができる。ここで、ロゴスの機能はアリストテレス読解に基づいたものとして提示されている。つまり、「ロゴスの機能は、アポファンシスとして、或るものを挙示しつつ見えるようにせしめることのうちに存するがゆえにのみ、ロゴスはシュンテーシスという構造形式を持ちうるのである」(SuZ, 33)。さらにこのシュンテーシスの「シュン」は、「或るものを、或るものと一緒にあることにおいて、〔つまり〕或るものを或るものとして見えるようにせしめる」(ebd.)ことを意味するとされる¹⁷⁾。ここに明らかのように、ロゴスの機能には Als 構造が含まれている。この節のロゴス解釈は、「存在論」における「論」の内実を論じている。とすれば、方法論的に、存在論的差異を前提とし、かつここから与えられる存在理解を手引きとする基礎的存在論は、まさにこの存在論を現象学的に遂行する際に、こうしたロゴスの機能による制約を受けざるを得なくなると言わねばならない。つまり、「Als 構造のほうが存在論的差異よりも先である」ことの内実は、端的に表現すれば、「方法論的に先である」、ということになるのだ。

IV 超越論的思考様式の突破

基礎的存在論において、存在論的差異は、差異化された差異として思惟される。ここに、Als 構造が働いていることはすでにみた。しかし、われわれはさらに問うべきである、Als 構造そのものはそもそもどのよ

うにして与えられているのかと。あらゆる現存在の振舞いには Als 構造が伴うのであり、様々な事象をこの構造が支持しているのであるならば、この Als 構造自身にもこの事態は当てはまるのでなければならぬ。或るものから或るものを差異化することなしに、なんらかの事態を捉えることはできるのだろうか。換言すれば、差異それ自身、差異化されない差異、さらには、Als それ自体はどのようにして思惟されるのだろうか。われわれは不可能な事態に直面しているのではないだろう。なぜなら、そのような問いが浮上する以上、思惟されるべき事柄としてそれは与えられてはいるからだ。しかし、それが如何に思考されるのかが問題なのである。ここに迷いの道が開けている。

これまで見てきたように、『存在と時間』を導く存在理解、そしてこの理解を与える存在論的差異は、超越論的思考様式をもって特徴付けられていた。そしてこの思考様式は、Als 構造をも取り込むものであった。ところが、この思考様式をもってしては、「差異としての差異」は思惟できないことが顕わになる。こうした超越論的思考様式からの脱却は、Als 構造に鑑みて、1929/30年冬学期講義に見出すことができる。「…『として』は、そもそも存在者がその存在において顕わになっており、その区別が生起している、ということに表現を与えるものなのである。『として』はそのような根源的に打ち破りつつある『間』[*einbrechenden Zwischen*] という構造契機を特徴づけるものなのである」(Ga 29/30, 530f.)。この講義では「区別」(Unterschied)の生起的性格、その根源性(Ga 29/30, 526)、そして同じことだが、Alsの「間」という契機への着眼が表明されている¹⁸⁾。存在論的差異の本質は、存在者とその存在との「間」へと「打ち破りつつ」あることのうちに存し、つまり、そのつど生起する Als そのものに存することとして現れてくる。差異化されてしまった或るものから差異を考えるのではなく、そのような差異化の働き、差異化として生起するような事態こそが、差異の本質と言うのでなければならない。してみれば、当然、存在論的差異そのものへの

アプローチも改めて模索されねばならないだろう。ハイデッガー自身、存在論的差異への自らの関わり方を反省的に捉えている同講義の文言は、注目に値する¹⁹⁾。

おそらく、存在と存在者との区別の問題は、われわれがこの問題を存在論にゆだね、そのように〔存在論的差異というように〕名づけることによって、早々とその問題系のうちで妨げられてしまっている。結局、われわれは逆にこの問題をより一層徹底的に展開しなければならぬのであり、それは、われわれがすでにその理念からして、不十分な形而上学の問題系としての存在論を退けるという状況に陥る危険を冒してもそうしなければならぬのである。ではその場合、われわれはなにを存在論の代わりに置くべきなのか。例えば、カントの超越論哲学か？……超越論哲学もまた転倒するにちがいない。それでは、存在論の位置になにが入り込むべきか。これは軽率でとりわけ外見上の問題である。というのも、結局、問題一般を展開することによって、われわれが存在論をなにか別のものによって置き換えようとするその位置というものが失われるからである。……存在論とその理念もまた転倒するほかはない。それはまさに、存在論の理念を徹底化することが、形而上学の根本問題系を展開することの必然的な一段階であったからなのである。

(Ga 29/30, 522.)

ここで告げられている事態こそ、ハイデッガー自らの存在論的差異への関わり方の批判であり、同時にそれは、基礎的存在論－メタ存在論構想、そして「存在の意味」を問い求めることへの批判でもあることは明白であろう²⁰⁾。下線をもって強調しておいた文言を、さらに言い換えるならば次のようになる。存在論的差異という洞察に基づいた基礎的存在論という理念は、なおも形而上学という土俵のうちで展開されていたこと、しかし、やはり歩まねばならない一つの「必然的な」道であっ

た、と。超越論的思考様式による存在論的差異への関わり方では、もはやその本質を捉えることはできない。では、差異そのもの、差異化する生起へと、超越論的思考様式を脱却しつつあるいま、どのようにこれへと接近することができるのだろうか。そして、「存在論の理念を徹底化することが、形而上学の根本問題系を展開することの必然的な一段階であった」ということは、ハイデッガーにとって、差異という事象への接近に鑑みてどのような意味をもつと言えるのだろうか。

V 差異それ自身への接近

ハイデッガーが超越論的思考様式を脱却しつつある際、そして、なおも存在論的差異が彼にとって極めて重要なモチーフであり続けたことを確認できる。つまり、ハイデッガーは依然として差異という事象へなんらかのかたちで迫ろうとしていたのである。『存在と時間』で語られる次の格率は依然として妥当するだろう。「真なる方法は、開示されるべき「対象」或いは対象領域の根本体制への相応しい先視に基づいている。それゆえ、真なる方法的省察は、…、同時に主題的存在者の存在様式についての説明を与えるのである」(SuZ, 303)。さらに、シュベントナーがこの文章に加えて言うように、「この方法的考察が明確に示しているのは、接近方法は対象の有り方に従うべきであり、その逆ではないということ」²¹⁾、なのである。ただし、その場合の「対象」は、存在論的「差異」なのであって、差異は存在者ではない、ということはここで付言しておかねばならないが。

冒頭に提示した「…ひとは、1927年から1936年までの存在論的差異への絶え間ない関わりを、必然的な迷いの道〔Holzweg〕として見なければならぬだろう」というハイデッガーの発言を、ここでその終りまで検討することはできない。以下では、1936年へと続く「迷いの道」にひとつの標識を立てることで満足し、それをもって結びにかえたいと思

う。29/30年までにひとつの道を歩いたハイデッガーは、なおも迷いの道を歩かねばならないのである。

その標識とは、あらかじめ提示しておくならば、やはり言葉という問題系である。まず、すでに確認したように、言葉の問題は『存在と時間』においては究明されるべき最重要主題として立てられることはなかった。しかし、これ以後ハイデッガーにとって言葉という事象が、とりわけヘルダーリンの詩作の読解を経ることによって、より主題的に論じられるようになることは周知のことである。さて、われわれは、言葉が分節化をその根本性格とすることをみた。そしてこの性格は Als 構造にも共通するものであった。存在論的差異は、分節化された或るものとして理解されていた。言葉という次元において、存在論的差異は自らを語り出すのであるが、超越論的思考様式は、結局その本質を顕わにすることはできない。それでもなお、存在論的差異は思惟されるべき事柄として残っている。さらなる思索の事柄としての差異化の働きそのもの、差異化として生起するような存在論的差異は〈どこで〉捉えることができるのだろうか。デリダが「ウーシアーとグランマー」という論考のなかでの確に述べているように、「差異（である）この痕跡の痕跡はそのような痕跡としては、つまりその現前性においては、とりわけ現れえないし、名づけられえない。このそのようなものとして [comme tel] こそが、まさにそれとして永久に隠れ去るものなのである」²²⁾。われわれの言葉で言えば、「そのようなものとして」とはつまり、Als そのものであり、差異化する働きそのものである。これらの事象をそれとして捉えようする限り、或いはそれとして名づけられた瞬間に、捉えられたそれ、名づけられたそれは当該の事象を言い当ることにはならないだろう。なぜならその瞬間は現前性によって支配されているからである。

ハイデッガーが古代形而上学の存在理解を特徴付けて述べる文章に、「存在者はその存在において「現前性」として把握されている」(SuZ, 25)、或いは「存在とは現前性における恒常性を意味する」(Ga 3, 240)

などがある。他方、基礎的存在論における現存在分析から析出された現存在の時間性は、将来を、現存在の存在の有限性に鑑みて、第一次的な契機としている。この基礎的存在論の主張は、存在忘却の歴史と言える西洋形而上学に対する、根拠の提示にして反復的取り返し (Wiederholung) にほかならない。しかし、このようなラディカルな態度にもかかわらず、当時のハイデッガーの思索はなおも従来の形而上学的な圏域のうちに含まれているとすることができる。なぜなら、様々な要因が考えられるだろうが、哲学する「言葉の本質」が自覚的に獲得されていなかったからであるし、また、哲学することがつねにその歴史のなかでしか始まることができない、ということへの洞察が深化していなかったからであろう。1934年の講演では次のように述べられている。「歴史の内的可能性の根拠は言葉のうちに存する。…言葉の本質はむしろ、言葉のなかで、人間一般が存在者へとはじめて乗り出し、言葉のなかで存在の根源的な露呈と開示 [Enthüllung und Offenbarung] が生じる。言葉は…この露呈することそのものである。言葉が生起するところのみ、或る世界が支配する」(Ga 16, 329f.)。しかし、このように述べることへの道も、本稿での考察からはなお遠い。

『存在と時間』以後の思索は、現存在の被投的側面を押し出し、全体における存在者との関係でこれを解釈しようとするメタ存在論へと続くが、この道程においても言葉の問題は前面に出ることはなかった。それは、このような、メタ存在論を含みこむ学としての基礎的存在論が、現存在をその存在論的差異の本質において捉えることができなかったからではないだろうか。現存在自身においても、その存在者的側面と、存在的側面とが、つまり存在論的差異が問題となるだろう²³⁾。そして、問うことが現存在の根本規定である限り (SuZ, 5)²⁴⁾、問われたものは言葉として語り出されねばならない。その際、どうしても言葉の存在性格が問題とならねばならないのである。

問われるべき差異そのものは、それが与えられている限り、思索する

ものにこれを語り出すように迫るだろう。そして、この差異化する働きが端的に不在だと論定することはできない。なぜならば、もし差異そのものが不在であるとしたなら、われわれはそもそもそれを名指すこともできないし、また思索を突き動かす契機となることもできないからである。したがって、それは与えられているのである。1930年代から言葉に関する論考が増えてくることは、与えられてはいるが、名指し難い或るものをめぐる「迷いの道」なのである。そして、この道は、哲学することが自己自身を語り出すのはつねにすでにその歴史——むしろ形而上学の歴史といったほうが適切であろう——からである以上、「必然的」であらねばならないのである。

注

- 1) ここで超越論的思考様式という表現は、或る事態が成立していること、このことが与えられるための前提を問う思考法、またはその基礎付けを行う思考法を表示する意図で用いた。本稿では、より掘り下げてこの思考様式を論じることはできない。ただし、この思考法がアプリアリという事象をめぐっているということだけ指摘しておこう。カントにおいて「超越論的」の内実には、アプリアリが示す問題系が含まれるが、ハイデッガーはアプリアリの根本性格を、認識作用に見るのではなく、「存在者の存在における、〔さらには〕存在の存在構造における構成系列の性格」(Ga 20, 102)であると解釈している。
- 2) ハイデッガーは、1957年フライブルク大学で行われた講演「同一性と差異」において次のように述べている。「ヘーゲルにとって思索の事柄は、絶対概念としての思惟である。われわれにとって思索の事柄は、仮に名づけるのならば、差異としての差異である。」(Martin Heidegger, *Identität und Differenz*, 12. Aufl., Stuttgart, 2002, S. 37)。ここで「として」が強調されていることに注目されたい。
- 3) Vgl. Ga 21, 145.
- 4) Karl-Otto Apel, *Transformation der Philosophie I*, Frankfurt am Main, 1973, S. 245f. (邦訳、カール・オットー・アーペル (磯江景孜他訳)『哲学の変換』二玄社、1986年、123頁以下参照)。
- 5) この、非現存在的存在者の存在を解釈すること、つまり「領域的存在論」は、1928年夏学期講義における「メタ存在論」がその役割を担っていた。

（酒井潔「衝迫・振動・超越——一九二八年夏学期講義における基礎有論の補足完成の試み——」秋富克哉・関口浩・的場哲朗共編『ハイデッガー『存在と時間』の現在』南窓社、2007年、72-92頁参照）。付言すれば、『存在と時間』において、「存在一般〔*Sein überhaupt*〕】という表現がみられる。例えば、「そのような存在体制〔実存する存在者の体制〕の理念のうちには、すでに存在一般の理念が存している」（SuZ, 13）と語られるが、これは非現存在的存在者の存在を含めて考量されていると言える。

- 6) Ga 26, 217.
- 7) Apel, a.a.O., S. 235. (アーベル、前掲書、109頁参照)。またハイデッガーは次のように述べている。「存在の構造と言葉の構造。存在者と言明された語りとの間に密接な相関関係がある。(ギリシア人にとって)。存在者の構造が、存在者についての語りの構造に反映する。」(Ga 22, 282)。
- 8) ラフォントによれば、「彼〔ハイデッガー〕は、基礎的存在論を企図するという意図に根付いている、超越論的哲学の方法論への自らの固執によって、存在論的差異の实体化的見解へと強いられている」と論じる。Cristina Lafont, *Sprache und Welterschliessung*, Frankfurt am Main, 1994, S. 39.
- 9) Carl Friedrich Gethmann, *Verstehen und Auslegung*, Bonn, 1974, S. 61.
- 10) 『存在と時間』16節における、手許的存在者から直前存在者への様態変容をハイデッガーは「脱世界化」と述べているが、この記述そのまま、解釈学的 Als からアポファンティッシュな Als への変容とパラレルに考えることができる。
- 11) Carl Friedrich Gethmann, *Vom Bewusstsein zum Handeln*, München, 2007, S. 178.
- 12) Gethmann, a.a.O., S. 181.
- 13) この「世界的」が意味するのは、内世界的存在者に付加される意味での「世界的」で理解されねばならない。Ferner, Friedrich-Wilhelm von Herrmann, *Subjekt und Dasein* (2. Aufl.), Frankfurt, 1985, S. 135f.
- 14) 個としての自我に端緒を置き間主観性へと至るのか、或いは、すでに構成された間主観性を基盤にした言語現象を端緒に置くのか、が問題なのではない。
- 15) さらに、『存在と時間』で語られる現の開示性は、「語りによる分節化を受けている」(SuZ, 349)とされる。ここから、世界—内—存在の「世界」が分節化されていると述べることは同義であろう。
- 16) 「分節化」という表現は、初期フライブルク時代においても用いられており、そこにはディルタイの影響が顕著に見られる。これについては、拙論「ハイデッガーのカテゴリ—解釈—二〇年代初期におけるディルタイ受容とアリストテレスにおける展開をめぐる—」実存思想協会編『実存と政

- 治 実存思想論集Ⅲ』所収、理想社、2006年を参照されたい。
- 17) ロゴスの機能は、このように「或るものを或るものとして見えるようにせしめる」機能と、同時に、「或るものを、それではないものとして顕わにする」機能をももつ。いずれにおいても、『存在と時間』の記述では「として」が強調されている。これは決して偶然ではないだろう。
 - 18) ケッテリングは、差異のこのような生起的性格が思惟されはじめるのは「性起」が主導語になる1936年以降だと解釈しているが、引用に見られるように、少なくとも1930年前後には、この生起的性格への表立った洞察が生じていたと言える。Emil Kettering, *Nähe Das Denken Martin Heideggers, Pfullingen*, 1987, S. 77. (ケッテリング (川原栄峰監訳) 『近さ—ハイデッガーの思惟—』理想社、1989年、66頁以下参照)。
 - 19) この29/30年冬学期講義の重要性について、そして、この時期に超越論的思考様式の維持が不可能になることについては、稲田知己『存在の問いと有限性』晃洋書房、2006年、特に第五章から多くの示唆を得た。
 - 20) ゲートマンは、Als 構造が「存在の意味」を規定していると解釈している。「Als の分析を根拠にして、存在の形式的意味はまた、現存在の遂行の普遍的地平として規定されるのである」(Gethmann, *Verstehen und Auslegung*, Bonn, 1974, S. 63)。
 - 21) Tibor Schwendtner, *Heideggers Wissenschaftsauffassung*, Frankfurt, 2005, S. 61.
 - 22) Jacques Derrida, *Marges de la philosophie*, Paris, 1972, p. 77.
 - 23) 現存在という術語と、「人間」という概念の関係性を、基礎的存在論とそれ以後の思索においてどのように変遷しているのかが跡付けられねばならないが、この課題はここでは扱えない。
 - 24) さらに、問いの遂行と現存在の可能性については、拙論「存在の問いの遂行としての現存在の可能性」『学習院大学人文科学論集15』所収、2006年を参照されたい。

Die ontologische Differenz und Als-struktur:
Ein Versuch vom 'notwendigen Holzweg' Heideggers

WATANABE, Kazunori

In der vorliegenden Abhandlung geht es um die Heideggerschen Auffassung der ontologischen Differenz von 1927 bis 1930. Unsere Interpretation versucht es herauszustellen, dass 'dem notwendigen Holzweg' Heideggers (Ga 15, 366) eine innere Beziehung der ontologischen Differenz zu der Als-struktur zugrundeliegt. In der Periode von "Sein und Zeit" beherrscht die transzendente Denkungsart die ontologische Differenz. Seiendes unterscheidet sich von Sein, und vice versa. Was diesen Sacheverhalt anbelangt, so wird Seiendes 'als' das von Sein differenzierte Etwas bestimmt. Die Differenz ist auf Grund dieser Dichotomie begreift. Hier befindet sich Als-struktur, das besagt, dass diese Struktur die Differenz ermöglicht. Im Jahre 1929/30 aber schlägt Heidegger anderen Weg ein, der die Differenz als Geschehen bedenkt, d.i. Als selbst zu einbrechen versucht. Dieser Weg wird sich als 'notwendiger Holzweg' erklären.

（人文科学研究科哲学専攻 博士後期課程3年）